

「道具」からみる 縄文晩期の生業について

—根挟みを中心に—

川添和曉

今回、食料獲得活動の立場で文化総体を検討する視点から、生業に使われたとされる根挟みについて総合的検討を行った。列島的視点からの分析を行い、従来からいわれてきたものとは別視点から、地域差を指摘した。さらに欠損・製作・再加工の状況を整理し、鹿角製品の製作状況を総体的に研究する必要を述べた。また、対応する石鏸については東北地域・東海地域を個別に分析し、東海地域では特に部分磨製石鏸の存在に注目した。これらから派生する問題を整理しつつ、最後に根挟みの機能について想定を行った。

1 はじめに

(1) 研究の経緯

「縄文時代」の「生業」は一様ではなく、各時期に日本列島各地で多様な活動を行っていたとされる。「生業」には、食料獲得や社会組織的な側面のみならず、道具の製作・交易、場合によっては精神文化的な側面など、さまざまな要素が絡み合っているのが実情であろう。できるだけこれらを切り離すことなく、総体として考察する研究も必要なのではないか考えるのである。食料獲得活動の視点から文化総体を検討する、いわば「生業史観」ともいるべき立場である。

今回は、東海地域でよく知られている「根挟み」について考察し、一つの糸口にしたい。「根挟み」の検討を行うことによって、それをめぐる道具の製作・使用体系のみならず、それが存在する生業活動とは実際にどのような意味をもつものであったのかに迫りたい。

なお、今回取り上げる「根挟み」は、縄文時代晩期に入り東北地域・東海地域を中心として盛行したものを中心とする。従って、それとは異質なものとされる関東地域の縄文時代後期に見られる一群は除外した。

(2) 根挟みについて

「根挟み」とは、二又に分かれる先端に鏸を挟んだと考えられる一つの独立した道具でありながら、使用時には矢の一部分として機能し

ていたと想定される遺物とする。現在、縄文時代のものは、考古遺物的にはすべて骨角器であり、鹿角製である。ここでは、仮に根挟みの部位名称・計測部位を提示する(図1)。根挟みを大きく「二又部」・「胴部」・「基部」に分け、二又部にみられる切込み部分のみを「切込み部」とする(赤色で示した部分)。また、切込み部が平面的に見える面を「平面」とし、その面から90度回転させた面を「側面」とする。

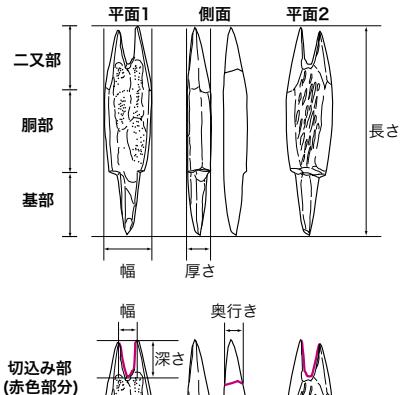


図1 根挟み部位名称および計測位置図

2 研究小史

(1) 研究動向

大きく三つの時期に分けることができる。

<Ⅰ期 はじめて資料紹介された時期 「矢筈」>

根挟みがはじめて取り上げられたのは、大野延太郎氏による。氏は数度にわたり三河地域の

踏査を行い、稻荷山貝塚(大野 1901)、伊川津貝塚(大野 1905)から遺物の採集を行っている。その用途を推定し、「矢筈」と報告されていることが注目される。

一方、岸上鎌吉氏は、早い段階に人工遺物・自然遺物の分析を通じて、原始時代の漁業史の構築を進められた(Kishinoue 1911)。その中の「Missile Implements」とされた項目で、宮城県沼津貝塚出土の根挟みについて説明されている。「... (stone arrow-heads) are devoid of such tang or shank (...) and are connected with the shaft by means of a horny arrow-nock (...) or by other means. The horny arrow-nock is coated with pitch at both extremities. ...」以上のように石鏃への装着やピッチの付着など、用途的には現在の根挟みと同様の内容を想定されている。このように、実質的に矢筈としての用途を想定していない場合も含めて、報告では「矢筈」という名称が広く使われることとなる。

<II期「根挟み」の名称>

2

文化財保護委員会による愛知県吉胡貝塚の報告で、久永春男氏がこの名称「根挟み」をはじめて使用されている(文化財保護委員会 1952)。これには山内清男氏の影響があったといわれる(渡辺 1973)。山内氏は同報告書で「所謂矢筈」とされ、「...矢筈と云われているが、これには疑問がある。...恐らく鏃を挟んだものと考えられる。...」と述べられている。また、詳細には述べられていないものの、東北地域のものと東海地域のものとは「形態が多少異なる」ことを指摘されている。

<III期 列島的視点(集成)と東北地域・東海地域での検討>

a. 列島的視点 渡辺 誠氏は、はじめて根挟みに関する出土遺跡集成とその所属時期をまとめられた(渡辺 1973)。材には鹿角のみが使用されるなど、根挟みに関する基本的事柄はこの時点ですでにまとめられたといえるであろう。丹羽百合子氏は東京都なすな原遺跡出土資料の報告の際に、「系統」という言葉を使い、東北地域のものと東海地域とのものとに

「製法」の違いがあることを述べられた(丹羽 1984)。金子浩昌・忍澤成視両氏は、縄文時代の骨角器集成を行う中で「鏃 III」としてまとめられ、金子氏も関わった、なすな原遺跡報告の事柄に基づく分類で、根挟みを概観されている(金子・忍澤 1986・1987)。

b. 東北地域・東海地域の検討

1. 東北地域 宮城県中沢目貝塚の1973年調査で石鏃が装着された状態の根挟みが出土した。この事例は、岸上氏により石鏃の装着が想定されて以来、それを実証するものとなった。また、報告書の中では対応する石鏃に対しても触れられている(須藤編 1984)。宮城県田柄貝塚では、層位的に時期区分された状態で大量の石器・骨角器が調査・報告された。それにより当遺跡での根挟みの帰属時期が提示されたばかりでなく、石鏃の帰属時期により無茎鏃の多出が連動する事柄が報告されている(新庄屋・阿部ほか 1986)。また、岩手県大洞貝塚では、最近の調査により二例目となる、石鏃が装着された状態の根挟みが出土した(金野編 2000)。

2. 東海地域 1969年に『日本貝塚の研究』が刊行される。この中に、稻荷山貝塚・吉胡貝塚などから出土した根挟みが報告されている。記述の中で根挟みの用途についても言及されており、注目される。1984年に愛知県伊川津貝塚の調査が行われた。この調査成果は、根挟み研究に大きな布石となった。上敷領久氏は根挟み・ヤス・釣針を取り上げ、渥美半島周辺の生業形態について考察されている(上敷領 1987)。氏の根挟みの分析は石鏃との対応関係を統計処理されたものであり、注目すべき手法である。これにより、氏は対応する石鏃について具体的な数値を提示している。また、根挟みの切込みの形態と石鏃の基部形態とを対応させたのも注目される。西本豊弘氏は、根挟みの出土「数」や有茎・無茎石鏃出土「数」から、骨角器の示す地域性、特に伊川津貝塚を中心とした東海地域の意味を考察されている(西本 1987)。このなかで破損した根挟みの再加工の存在についても触れられている。

(2) 研究・分析の方向性

以上、今までの研究を概観した。これによ

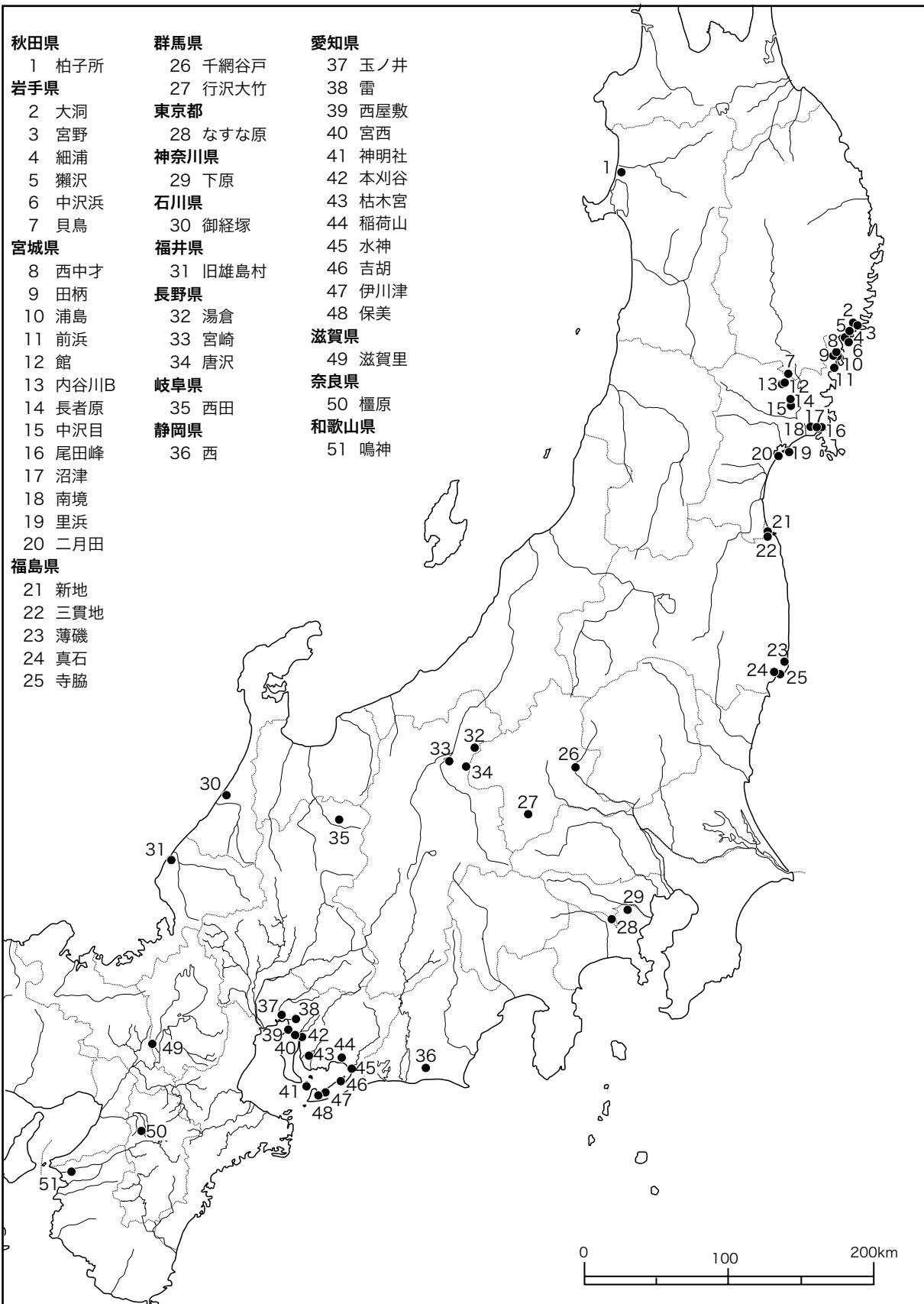


図2 根挟み出土遺跡(番号は表1と一致)

表1 根挿み出土主要遺跡一覧(番号は図2と一致)

番号	遺跡名	所在地	時期	点数	断面形		脇・基部		文献	備考
					a	b	c	d	A	
1	柏子貝塚	秋田県能代市	晩期前葉(大洞BC)	2	○		○	○		大和久震平,1966『柏子貝塚—第2次・第3次発掘調査報告書』秋田県教育委員会。
2	大洞貝塚	岩手県大船渡市	晩期	16	○		○	○	○	金野良一編,2000『大洞貝塚』大船渡市教育委員会。岩手県立博物館,1995『岩手県立博物館収蔵資料目録 第11集 小田島コレクション その2』。
3	宮野貝塚(A地点)	岩手県三陸村	後期後葉～晩期初頭(宮戸島II～大洞B)	2		○		○		三陸村教育委員会,1962『宮野貝塚』。
5	瀬沢貝塚	岩手県陸前高田市	晩期(大洞B～C2式C1・C2式か)	4	○	○	○	○		及川 潤・金子浩昌,1977『瀬沢貝塚 緊急発掘調査概報』陸前高田市教育委員会。松浦有一郎・安藤広道・小野寺恵子・金子浩昌,2003『東京国立博物館図版図録 繩文遺物篇(骨角器)』東京国立博物館。
6	中沢浜貝塚	岩手県陸前高田市	晩期	3		○		○		陸前高田市教育委員会,1987『中沢浜貝塚発掘調査概報II』。陸前高田市教育委員会,1988『中沢浜貝塚発掘調査概
7	貝鳥貝塚	岩手県花泉町	後期末葉～晩期・後期中葉?	5		○		○		草間俊一・金子浩昌,1971『貝鳥貝塚』花泉町教育委員会。
9	田柄貝塚	宮城県気仙沼市	晩期初頭	41	○	○	○	○	○	新庄屋元晴・阿部恵他,1986『田柄貝塚』III.宮城県教育委員会。
10	浦島貝塚	宮城県気仙沼市	大洞BC式	3						宮城県鼎が浦高等学校社会班,1965『氣仙沼周辺遺跡の概要及び大島機草貝塚・大浦島貝塚発掘調査報告』。
11	前浜貝塚	宮城県本吉町	晩期	1						百々幸雄,1979『前浜貝塚』本吉町文化財報告書第2集。
14	長者原貝塚	宮城県南方町	晩期	1	○			○		阿部恵・遊佐五郎,1978『長者原貝塚』南方町文化財調査報告1。南方町教育委員会。
15	中沢貝塚	宮城県田尻町	晩期前葉(大洞BC)	6	○		○			須藤 隆編,1984『中沢貝塚』東北大学文学部考古学研究会。
16	尾田峰貝塚	宮城県石巻市	後期後葉～晩期前葉	7	○	○		○		楠本政助ほか,1967『尾田峰貝塚出土資料』石巻古代文化研究所。
17	沼津貝塚	宮城県石巻市	後期～晩期	9	○	○		○	○	Kamakichi Kishinoue,1911 Prehistoric Fishing in Japan. Journal of the College of Agriculture, Imperial University of Tokyo 7-3,pp.327～382.毛利総七郎・遠藤源七,1953『陸前沼津貝塚骨角器図録』・『陸前沼津貝塚骨角器図録解説』東京。松浦有一郎・安藤広道・小野寺恵子・金子浩昌,2003『東京国立博物館図版図録 繩文遺物篇(骨角器)』東京国立博物館。
19	里浜貝塚	宮城県鳴瀬町	後期～晩期	4	○	○		○		小井川和夫・岡村道雄,1985『里浜貝塚』IV.東北歴史資料館。阿部博志・須田良平,1997『里浜貝塚』X.東北歴史資料館。
20	二月田貝塚	宮城県七ヶ浜町	後期後葉～晩期	1	○			○		塙金女子高等学校社会部,1972『二月田貝塚II』。
21	新地貝塚	福島県新地町	後期～晩期	1	○			○		八幡一郎,1924『磐城國小川貝塚発見の骨角器』『人類学雑誌 40-9』326～335頁。
22	三貴地貝塚	福島県新地町	～晩期中葉(～大洞C2)	4						森 幸彦・設楽博己,1988『三貴地貝塚』福島県立博物館。
23	薄磯貝塚	福島県いわき市	後期～晩期	2?		○		○	○	大竹憲治・山崎京美,1988『薄磯貝塚』いわき市教育委員会。
24	真石貝塚	福島県いわき市	～晩期中葉(～大洞C2)	2	○			○		西村正衛,1968『真石貝塚の調査』『小名浜』221～228頁。福島県いわき市教育委員会磐城出張所。
25	寺脇貝塚	福島県いわき市	後期～晩期	26	○	○	○	○	○	江坂輝弥・渡辺 誠,1968『寺脇貝塚発掘調査報告』『小名浜』157～218頁。福島県いわき市教育委員会磐城出張所。渡辺一雄・松本友之・渡辺誠・馬目順一,1966『寺脇貝塚』いわき市教育委員会。
26	千網谷戸遺跡	群馬県桐生市	後期～晩期							1978『千網谷戸遺跡調査報告書』桐生市教育委員会。
27	行沢大竹遺跡	群馬県妙義町	後期～晩期中葉	1	○			○		飯田陽一ほか,1998『行沢大竹遺跡』財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
28	なすな原遺跡	東京都町田市	晩期初頭	2	○			○		成田勝範ほか,1984『なすな原遺跡』なすな原遺跡調査会。
29	下原遺跡	川崎市多摩区	晩期前葉～中葉	1	○			○		浜田晋介,2000『下原遺跡』川崎市市民ミュージアム。
32	湯倉洞窟	長野県高山村	後期～弥生	2	○	○				関 孝一ほか,2001『湯倉洞窟』高山村教育委員会。
33	宮崎遺跡	長野県長野市	晩期中葉	2	?			○		長野市教育委員会,1988『宮崎遺跡』。
34	唐沢岩陰	長野県真田町	後期～晩期	5	○			○		櫛口昇一,1983『唐沢岩陰遺跡』『長野県史 考古資料編 主要遺跡(北・東信)』長野県史刊行会。
35	西田遺跡	岐阜県丹生川村	後期後葉～晩期	1						谷口和人,1997『西田遺跡』財団法人 岐阜県文化財保護センター。
36	西貝塚	静岡県磐田市	後期後葉(宮滝新式)	1	○			○		麻生 優編,1961『西貝塚』磐田市教育委員会。
30	御経塚遺跡	石川県野々市町	後期中葉～晩期	1	○					新美倫子,2003『御経塚遺跡の自然科学的分析』『野々市町史』資料編)考古 古代・中世.97～102頁。野々市町。
37	玉ノ井貝塚	名古屋市南区	晩期前葉	4	○	○		○		綿郷 茂編,2003『埋蔵文化財調査報告書44 玉ノ井遺跡(第3・4次)』名古屋市教育委員会。
38	雷貝塚	名古屋市緑区	晩期	5	○			○		伊藤正人・川合 剛,1993『名古屋の繩文時代 資料集』名古屋市見晴台考古資料館。
39	西屋敷貝塚	愛知県知多市	晩期前葉	1		○		○		杉崎 章他,1958『西屋敷貝塚』知多町教育委員会。
40	宮西貝塚	愛知県東浦町	晩期前葉	3	○			○		杉崎 章他,1965『宮西貝塚』東浦町教育委員会。
41	神明社貝塚	愛知県南知多町	後期後葉～晩期前葉	3	○			○		山下勝利編,1989『神明社貝塚』南知多町教育委員会。
42	本刈谷貝塚	愛知県刈谷市	後期末～晩期前葉	3	○			○		加藤岩蔵・齋藤嘉彦ほか,1972『本刈谷貝塚』刈谷市教育委員会。
43	枯木宮貝塚	愛知県西尾市	晩期前葉	4	○			○		牧 富也ほか,1973『西尾市史 自然環境・原始古代』西尾市史編纂委員会。

番号	遺跡名	所在地	時期	点数	断面形		胴・基部			文献	備考	
					a	b	c	d	A	B	C	
44	稻荷山貝塚	愛知県小坂井町	後期後葉～晩期中葉	20	○	○			○			大野延太郎,1901「三河國発見の鹿角器を見て」『東京人類学会雑誌』16-182,321～325頁。東京人類学会。清野謙次,1969『日本貝塚の研究』東京 岩波書店。出口剛,1992『平井稻荷山』小坂井町教育委員会。
45	水神貝塚	愛知県豊橋市	晩期前葉～中葉	1	○			○				芳賀賜編,1997『水神貝塚』、豊橋市教育委員会。
46	吉胡貝塚	愛知県田原市	後期～晩期	87	○	○		○				文化財保護委員会,1962『吉胡貝塚』。清野謙次,1969『日本貝塚の研究』東京 岩波書店。
47	伊川津貝塚	愛知県渥美町	後期後葉～晩期中葉	157	○	○		○				大野延太郎,1905「愛知縣下旅行調査報告」『東京人類学会雑誌』20-230,344～351頁。東京人類学会。久永春男ほか,1972『伊川津貝塚』渥美町教育委員会。小野田勝一・春成秀爾・西本豊弘,1988『伊川津遺跡』渥美町教育委員会。小野田勝一・芳賀賜・安井俊則,1995『伊川津遺跡』渥美町教育委員会。
48	保美貝塚	愛知県渥美町	晩期	5	○			○				小林知生他,1966『保美貝塚』渥美町教育委員会。
49	滋賀里貝塚	滋賀県大津市	晩期(滋賀里II～IV)	11	○	○	○	○				田辺昭三編,1973『湖西線関係遺跡調査報告書』湖西線関係遺跡調査団。
50	樅原遺跡	奈良県樅原市	晩期前葉	11	○	○		○	○	○		末永雅雄,1961『樅原』奈良県教育委員会。
51	鳴神貝塚	和歌山県和歌山市	晩期後半	3	○			○				石部正志ほか,1968「鳴神貝塚発掘調査報告」『和歌山県文化財学術調査報告書』第III冊、和歌山県教育委員会。

り、以下のことを行っていく。

(1) 列島的視点で再度分析を行う。これまでいくつか言われてきた、東北地域と東海地域との地域差を再検討する必要があるからである。

(2) 根挟みと石鏃との対応関係を再検討する。上敷領氏の分析手法は注目すべきであるが、これには根挟み自体の分析がさらに必要であると考えられる。

(3) 製作工程の復元および再加工の事例を考察し、その意義を検討する。特に再加工に関して、西本氏は文章で触れられているものの、現在これを具体的な事例で示したのは、管見の限りでは名古屋市玉ノ井遺跡の報告での新美倫子氏の指摘のみのようである(新美2003)。事例を集め、体系的な検討が必要であろう。

(4) 道具としての根挟みが生業の技術体系内にどう位置づけられるものか、の検討を行う。

3 根挟みの分布・地域性

(1) 出土遺跡、時期的・地域的分布

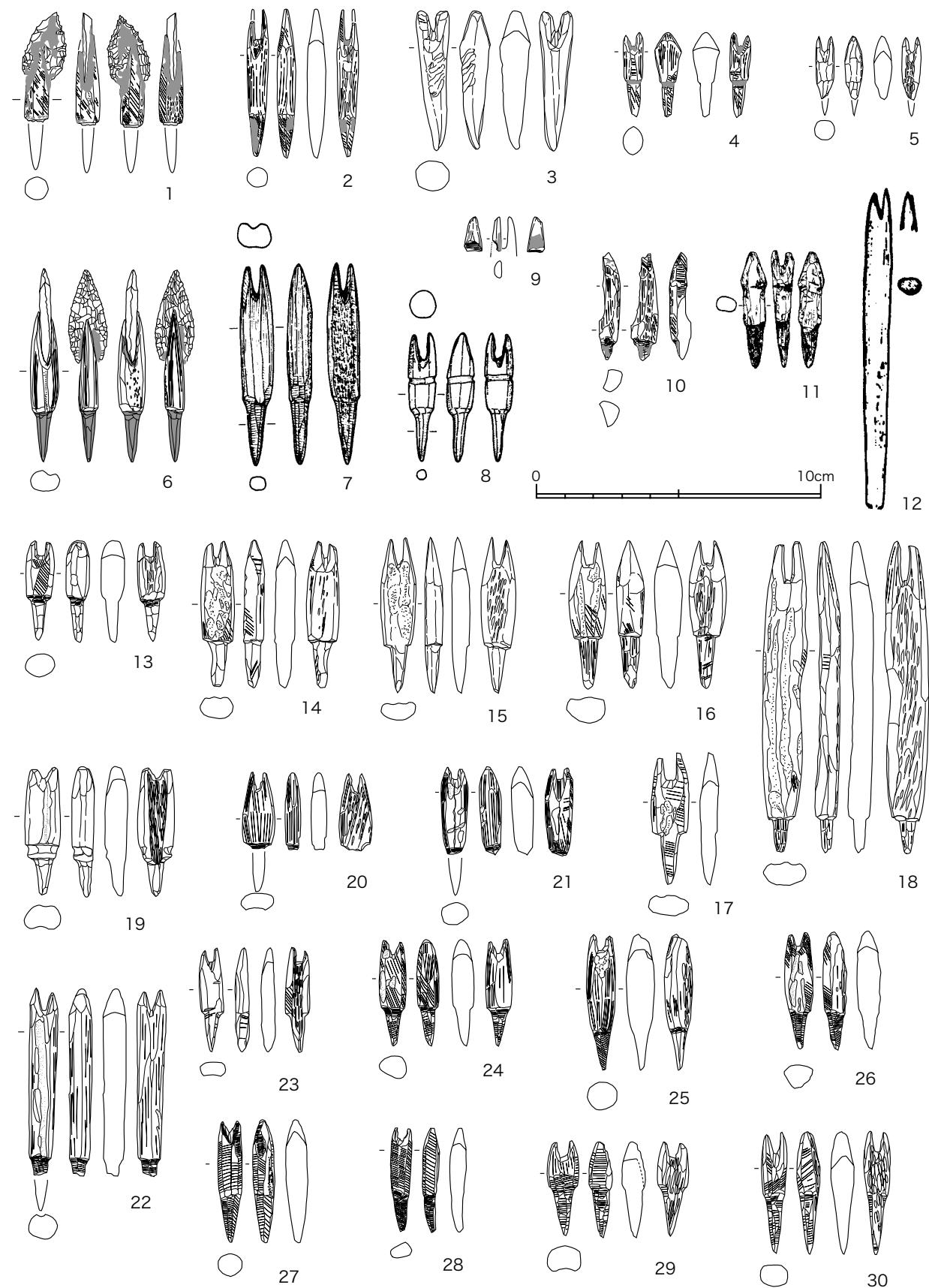
管見の限りでは、現在、根挟みは51遺跡470点以上が出土している(図2・表1)。地域的な広がりでは、北は秋田県柏子所貝塚から西は和歌山県鳴神貝塚までと、これまで知られている通りである(註1)。東北地域と東海地域の太平洋岸を中心に出土遺跡が固まっており、出土点数も大多数はここからのものが多い。一方、群馬・東京・神奈川・長野・岐阜・

奈良など、貝塚の形成がみられない内陸部の遺跡からでも出土例が知られているのは注目される。今後の調査により、内陸部の遺跡からの出土例は増加するものと考えられる。日本海側の地域では柏子所貝塚と福井県旧雄島村から出土したとされる例に加え、最近、石川県御経塚遺跡からの出土例も報告された。今後、日本海側の地域での動向も注意したいところである。

時期的にはこれまで縄文時代後期後葉から晩期中葉までといわれているものの、後期後葉に属する可能性が高いとされる例は、限られているのが現実である。これは、根挟みが出土している遺跡の多くは後期後葉から晩期へと継続して営まれていることが理由でもある。東海地域では、静岡県西貝塚で宮滝新式の土器と共に伴した出土例が報告されている(麻生編1961)。これにより東海地域では後期後葉から根挟みが存在すると言われているものの、ほぼ同時期の同県の鷺塚貝塚からは現在までのところ根挟みの出土が知られていないことなどから、これが渥美半島などの根挟みに直接つながるものかどうかは即断できないであろう。

一方、晩期に属するとされる事例は、いくつか知られている。田柄貝塚出土品の多くは、晩期初頭に属するものと報告されている。また、中沢目貝塚からは石鏃装着の見られる根挟みは晩期大洞BC式期とされている。伊川津貝塚でも、晩期初頭とされるV層より上層からの出土が主体である。

(註1) 金子・忍澤両氏によると、青森県亀ヶ岡遺跡からの出土もあるとのことである(金子・忍澤1986)。



1~5 大洞貝塚、6 中沢貝塚、7~10 田柄貝塚、11 里浜貝塚、12 唐沢岩陰、13 玉ノ井貝塚、
14~16 稲荷山貝塚、17・18 吉胡貝塚、19~30 伊川津貝塚、

図3 根挿み実測図 1(7・8・11・12は各報告書より転載)

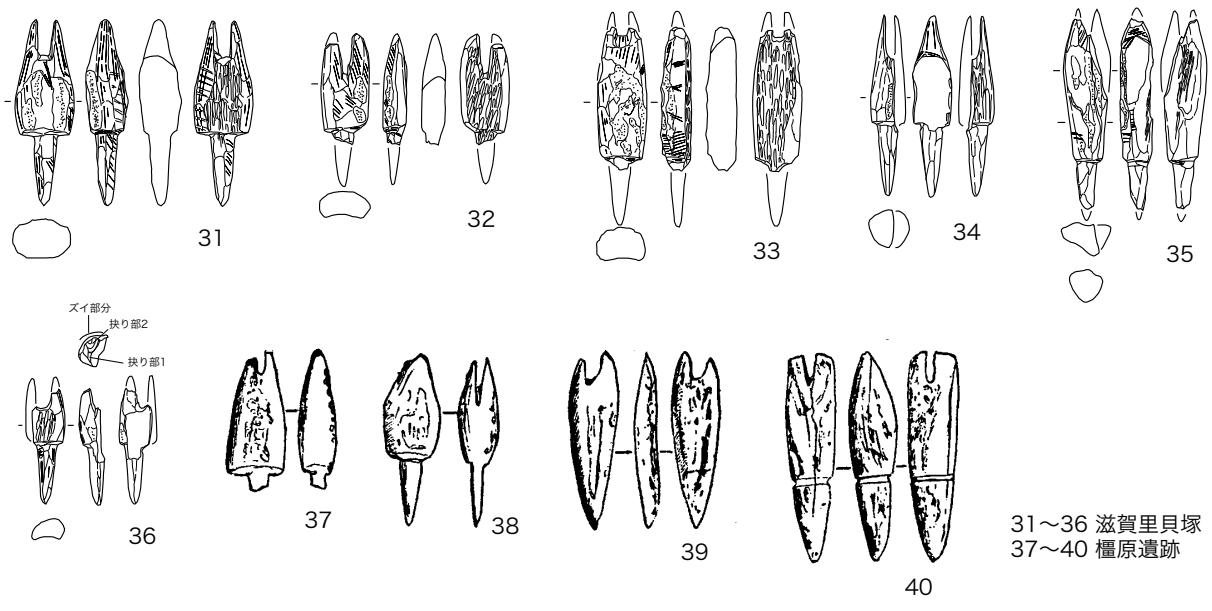


図4 根挟み実測図2(37～41は報告書より転載)

また、終焉に関しては、東北地域では大洞C2式期までのようにある。中部高地の長野県宮崎遺跡例が佐野II式期までのようにあり、東海地域でも五貫森式期以降を主体とする遺跡からの出土はないようであることから稻荷山式期から西之山式期までの間で使用されなくなったと考えられる。鳴神貝塚では晩期後半を主体とする、搅乱を受けていない貝層中から出土したと報告されている。確実視できる根挟み最終末の事例と位置づけることができよう。

(2) 形態分類とその分布傾向(表2)

根挟みの形態について三つの属性に注目した。

第一の属性は最大径の断面形である。第二の属性は胴部と基部との境目についてである。第三の属性は切込み部の形態である。第三の属性は、矢の一部分としての根挟み本来の機能に関連するもので、対応する石鏃との関係をみるための属性である。第二の属性は、材の種類や使われ方をみるためである。第一の属性は、矢の一部分としての機能的な差はそれほど大きくなないと考えられる属性である。第三の属性は後述する石鏃との対応関係のところで触れることとし、ここでは第一・第二の属性について述べていく。

最大径部の断面形は、(a)から(d)の四形態に分類できる。最大径の部分が二又部と胴部と

の境に相当するものと、それが胴部中央部に相当するものとが存在する。断面形(a)は東北地域に多くみられ(図3の4・11など)、その他の地域では奈良県橿原遺跡で報告されている以外にはみられない(図4の38)。一方、断面形(b)・(c)はどの地域にも見られる形態のようである。断面形(d)は現在のところ滋賀県滋賀里貝塚からの一例しか見られない(図4の35)。

胴部と基部との境目については、(A)から(C)の三形態に分類できる。(A)は根挟み分布域全体にみられる形態で、これが基本形態であると考えられる。一方、(C)の分布は東北地域に固まるようである。東北地域以外では、時期が新しくなっても形態(A)のみであることは注

表2 形態分類一覧

切込み部	
平面形態	凹形
	V形
	(i) A
	(ii) A
胴部・基部	
側面形態	(iii) A
	(A) 段により区分
	(B) 溝により区分
(C) 段・溝による区分なし	

目できる。また、形態(B)は極めてまれで、樞原遺跡の一例のみである(図4の40)。胴部に溝がつけられているものはまれに存在する(図3の8・19)。この樞原例も形態(C)のものに溝が施されたものである可能性もある。

また、従来より、東北地域の例と東海地域の例との異なる点として、長さ、特に胴部の長さがいわれている(註2)。確かに、東北地域以外で長さの長いものが散見される。田柄貝塚では7cm前後が最長である。一方、完形品で最も長いのは全長11cmを測る吉胡貝塚の例である(図3の18)。長野県唐沢岩陰遺跡の例は基部が欠損しているものの、11.2cmと現長でもその吉胡例よりも長い(図3の12)。

4 製作・使用・廃棄について

(1) 製作について

上にも記したように、根挟みは現在までのところすべて鹿角製である。ここでは、最大径断面(a)・(b)の資料を中心に製作工程について述べていく。

鹿角からの材の取り方は、大きく二通りである(図5)。一つは、角枝の先端を利用し先端部側を基部として作られているもので、岩手県大洞貝塚や奈良県樞原遺跡などで若干みられるのみである。もう一つは、角幹部分を半截した材、およびそれを板状にした材から作られるもので、これを出自とするものが大多数である。

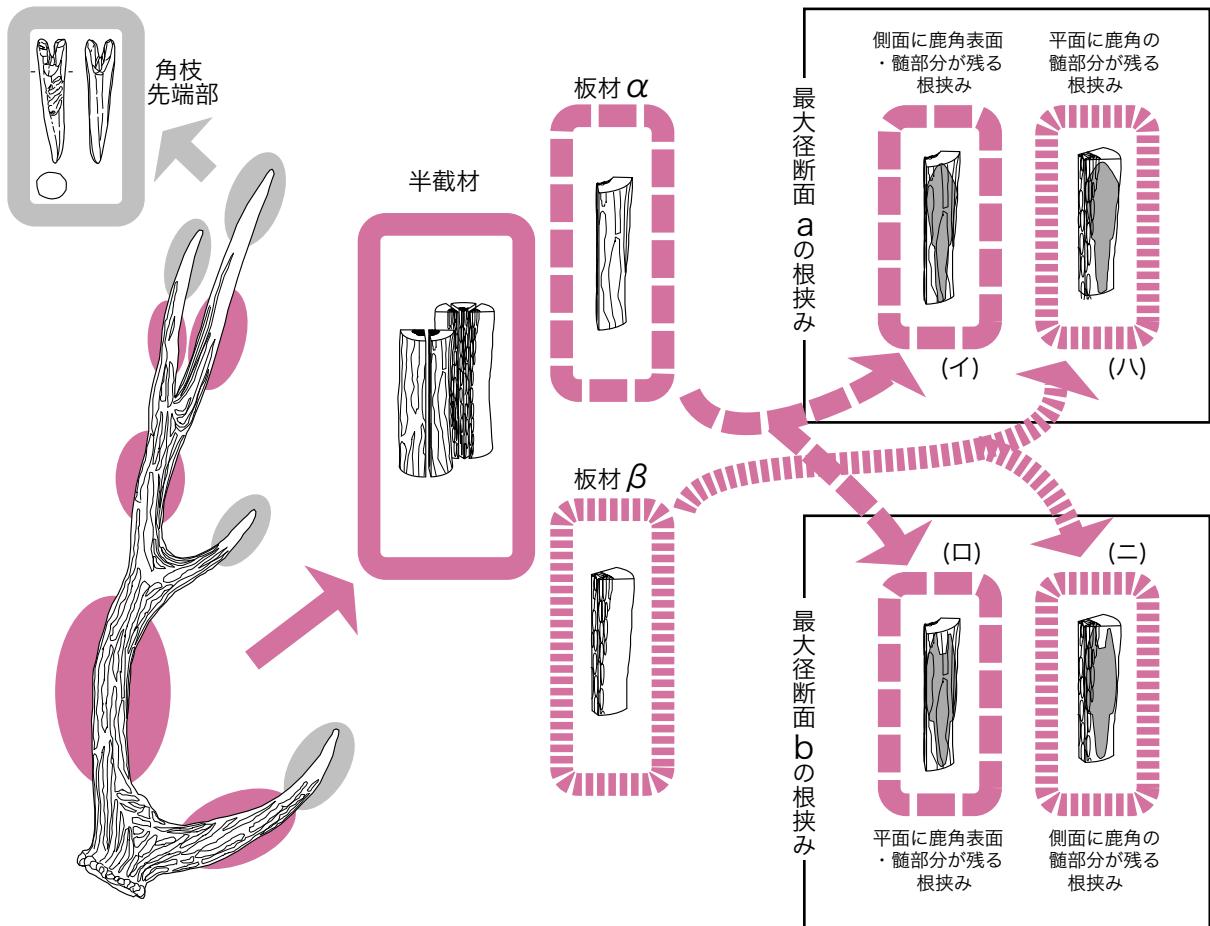


図5 根挟みの製作工程一案

(註2)筆者は後述するように、破損した根挟み自体に再加工が施されたものもあると考えている。しかしながら長さによる地域の違いはある一定の意味を有するものと考える。それは当時の人たちの破棄を行うまでの使われ方の差の表れであると考えるからである。

板材にしてから根挟みが作られる場合、その板材は、(α) 鹿角の表皮部分を中心とされた板材と、(β) 髓の見られる中心部に向けてとられた板材という二種類存在していたようである。板材(α)から最大径断面(a)の根挟みを製作する場合、側面に鹿角表面や髓部分が残存するもの(イ)となる。一方、最大径断面(b)の根挟みを製作する場合、平面に鹿角表面や髓部分が残存するもの(ロ)となる。また、板材(β)から最大径断面(a)の根挟みを製作する場合、平面に鹿角表面や髓部分が残存するもの(ハ)となり、最大径断面(b)の根挟みを製作する場合、側面に鹿角表面や髓部分が残存するもの(ニ)となる。東北地域においては(イ)(ロ)(ハ)(ニ)がすべて見られる一方(註3)、東海地域では(ロ)が圧倒的に多く、(イ)(ハ)(ニ)の根挟みは遺物としてほとんど存在しないのは注目される。

(2) 欠損傾向について

根挟みは、そのほとんどが破損品である、といえるほどである。遺物の観察の結果、(A)二又部の欠失・(B)二又部と胴部の欠失・(C)基

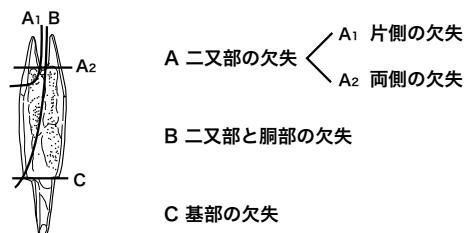
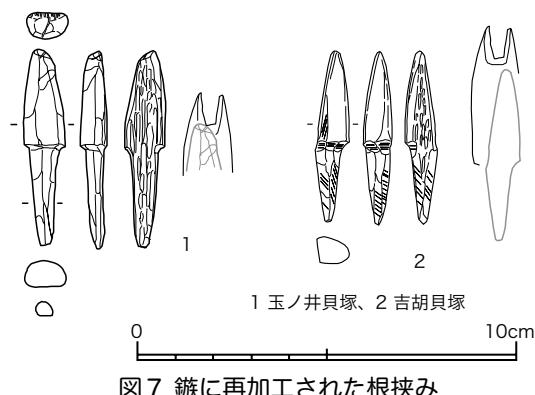


図6 根挟み欠損部位傾向図



(註3) 中沢貝塚で、根挟みの未製品とされるものが1点報告されている。板材(α)から最大径断面(b)の(ロ)を製作しようとしたものと考えられるか。

部の欠失、の大きく三パターンに分けられる(図5)。パターン(A)は片側の欠失か両側の欠失かでさらに二分される。破損はパターン(A)・(B)・(C)のいずれか、もしくは複合したものと理解することができる。その中で特に多いのはパターン(A)・(B)の傾向である。これは使用時に二又部を中心として縦方向に強い力が加わった結果と考えることができ、根挟みが二又部に石鏃を挟み込んで使用したものとする根拠の一つとすることができよう。

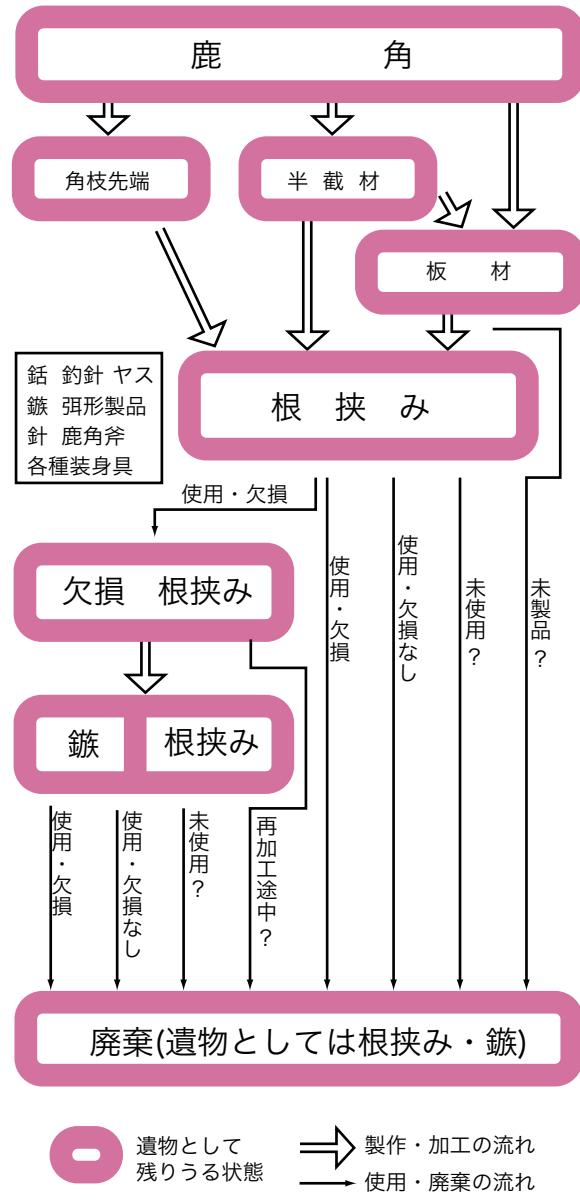


図8 根挟みの製作・使用・廃棄の流れ

(3) 再加工品について

また、欠損率が高かった根拠みは、再加工してまた使用されていたことが指摘されている。田柄貝塚では、欠損パターン(B)のものをそれまでの切込み部に対して直角方向に再び切込み部を作り使用されたものが見つかっている(図3の10)。また、滋賀県滋賀里貝塚でも欠損パターン(B)のものをそれまでの切込み部に対して45度の方向に作り直している例がある(図4の36)。なお、田柄貝塚では二又部の一部のみの出土が報告されているが、それには二又部と胴部との境で擦り切られた痕跡が残されている。再加工の際に擦り切られたものと考えられる(図3の9)。

鹿角製鏃には、根拠み欠損品を再加工して作られた可能性が考えられるものがある(図7)。愛知県玉ノ井貝塚の例は、欠損パターン(A)のものを再加工したものと考えられる。先端部に刻み状の痕跡がみられるが、恐らく切込み部削出時の加工痕であろう。吉胡貝塚の例は、欠損パターン(B)のものをもとに欠損部を研磨した再加工が施されたものと考えられる。両者とも東海地域の事例であり、最大径断面(b)の、板材(β)から作られた(口)である(註4)。

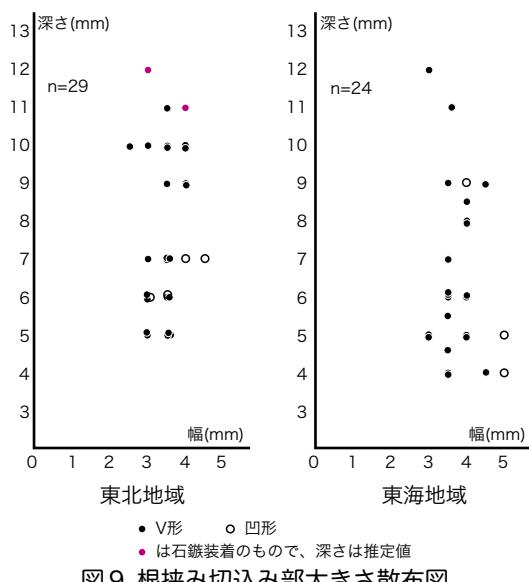


図9 根拠み切込み部大きさ散布図

(註4) 今回、東北地域の根拠み転用の鹿角製鏃の様相を明らかにできなかった。(イ)(ロ)(ハ)(ニ)がすべて見られるため、鹿角製鏃の中で根拠み出自の可能性があるものの幅は広がるものと考えられる。

(註5) 切込み部の形態は、着装石鏃との関係を考える上で重要である。しかし、切込み部側面形態が図化されたものはほとんどない。根拠み自体の表裏両面と側面が図化されていればある程度想定は可能であるものの、厳密ではない。ここに切込み部側面形態の必要性を提唱する次第である。

以上のことから、根拠みの製作・使用・廃棄の流れを図示した(図8)。実際は、各地域において鹿角製品の様相が異なるため、同じ根拠みを製作するにも、状況が異なることが想定される。

5 機能の実際

(1) 装着された石鏃について

根拠みに対応する石鏃が無茎鏃であることは、容易に理解できるところである。

その前段階として、対応する根拠みの切込み部に関しての検討が必要である。それは、上敷領氏が「ネガとポジの関係」と言わされたように、使用時に大きな力が加わると考えられる切込み部は、装着による不整合部分はできるだけなくすように調整されたことが想定されるからである。ここでは結果のみを述べるが、今回は平面形態と側面形態とに分けて分類を試みた(表2)。平面形態では、溝状に深く掘り込まれているものと、浅くて開放気味になっているものとに分けられる。前者を「凹形」、後者を「V形」とする。側面形態では、(i) 緩い円弧を描くもの、(ii) 鋭角気味になるもの、(iii) 左右非対称のもの、とに分けられよう(註5)。

まず、平面形態についてである。切込み部の深さと幅の計測を試みた(図9)。幅は2.5mmから5mm、深さは4mmから12mmまでの範囲におさまるもの、「凹形」は幅が4.5mm以下と、「V形」に比べ若干幅が狭い傾向にある。特に「凹形」の幅は、3mmから4mmの間におさまる資料が大多数である。東北地域と東海地域との資料を比較しても、切込み部の大きさには大きな違いはないものの東海地域の資料に若干深さが浅いものがみられる。また、側面形態に関しては、平面形態「凹形」には側面形態(i)(ii)(iii)がすべて見られる一方で、平面形態「V形」には側面形態(i)(ii)のみのようである。これも東北地域と東海地域とでは特に大きな差はなさそうである。

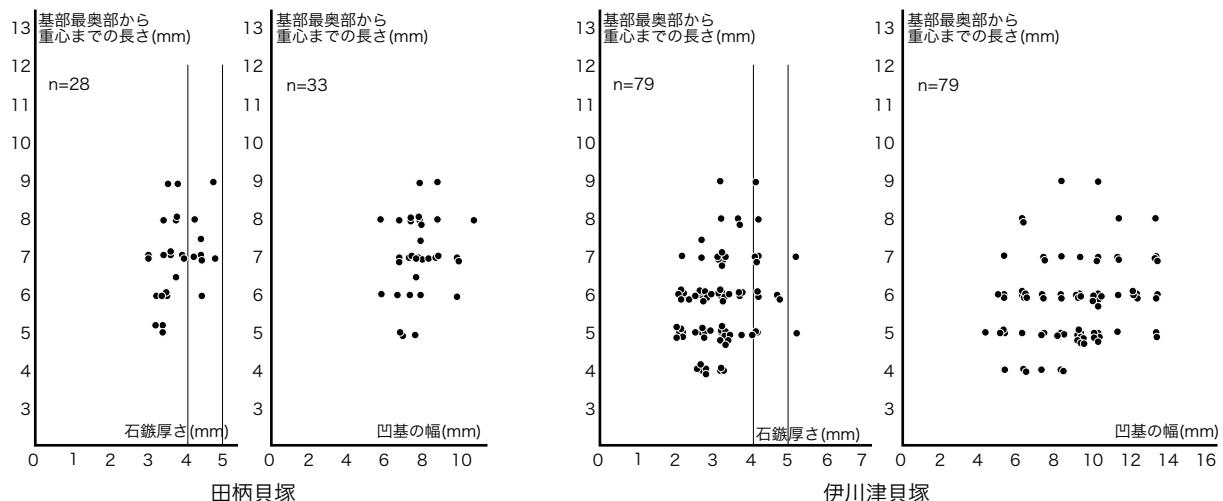
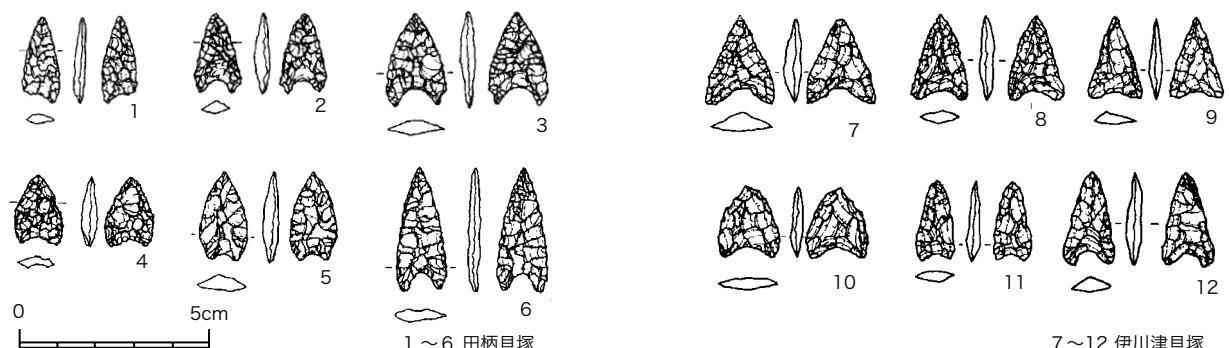


図 10 石鏃測定値散布図



1・2・4 硅化凝灰岩、3・5 硅質頁岩、6 玉髓、7・10 チャート、8・9・11・12 安山岩

図 11 石鏃実測図 (原図・石材名とともに報告書より転載)

以上のこととを基に、装着された石鏃について検討していく。しかし、この時期は地域により石鏃総体のあり方が異なるため、全地域を一括した議論は難しい。ここでは東北地域と東海地域と分けて検討をしていきたい。

1. 東北地域

この地域では大きく二つの点から、対応する石鏃に対してある程度絞り込みがなされている。

一つは第一級資料として石鏃が装着された状態の根挟みが出土していることである。現在のところ大洞貝塚(図3の1)と中沢目貝塚(同図の6)の二例である。これらを観察すると、石鏃の重さの加わる中心部分(ここでは「重心」と呼称する)付近まで、挿入されている様子が見られる。これらの根挟みは図9で見ても、切込み部の深さが10mm以上と深い部類に入るものである。一方、これらの石鏃自体は似た形

態を有している。平面形態が縦長気味のものであり、側面観は扁平であるものの、先端部は若干細めに鋭く作り出されているようである。石材は両者とも「頁岩」ということである。

もう一つは田柄貝塚の報告である。東北地域ではこの時期、有茎鏃が盛行することが知られている。しかしこの遺跡では、根挟みが固まって出土した層位と、無茎鏃のまとまった出土がみられた層位が一致することから、これらの無茎鏃が根挟みに対応する可能性が高いことが指摘されている。これらの石鏃は縦長気味のもので、凹基部分が浅い形態のものが大多数のようである(図11)。石鏃凹基部分の形態と、根挟み切込み部側面形態(i)(ii)(iii)とを比較しても特に違和感なく整合するものが多い。石鏃自体の幅は3mmから5mmまでの間におさまる、根挟み切込み部の幅と一致する。ま

た、ここで報告されている石鏸の凹基部分の幅は5mmから10mmまでであり、その中でも6mmから8mmまでが大多数である。これは根挟みの切込み部側面奥行きに符合する値といえよう(図10)。

2. 東海地域

東北地域とは異なり、東海地域ではこの時期は有茎鏸よりも無茎鏸が広く使われるようである。これらの無茎鏸がどの程度根挟みに対応するかを考察するために、根挟みとともに石鏸の出土が層位的に報告されている伊川津貝塚1984年調査の事例をみていく(図11)。この遺跡出土の石鏸群は、石材はともかくとして、形態的には東海地域の晚期前半期の石鏸形態をよく表していると考えられるからである。

石鏸の厚さは2mmから5.5mmとの幅であるが、多くのものは幅4mm以下のようにある。基部最奥部から重心までの長さは田柄貝塚例よりも若干短いものがみられるが、これは東海地域の根挟み切込み部の深さと一致する傾向である。また、田柄貝塚の例とは大きな相違が見られる点は、凹基部分の幅が広いものが多く存在する点である。田柄貝塚で見られるような、凹基部分の幅が根挟み切込み部側面奥行きにほぼ一致する石鏸もみられるものの、根挟みの切込み部側面形態奥行きと比べて、凹基部分の幅が数mmほど長いものもむしろ主体的に存在する。東海地域では、これらの石鏸も根挟みに対応していたものと考えられる。それは、次にあげる部分磨製石鏸の形態からも窺えられる。

(2) 東海地域の部分磨製石鏸について

東海地域では、後期以降、下呂石製の石鏸が

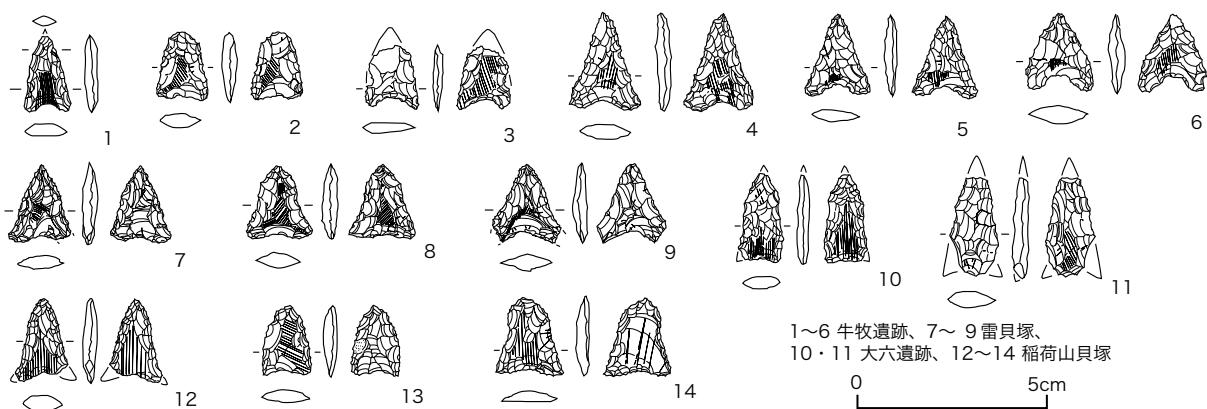


図12 部分磨製石鏸実測図

多用されることが知られている。そうした石鏸の中には、石鏸の基部から重心部分を中心として研磨工程を行った、部分磨製石鏸の存在が知られている。齋藤基生氏は、縄文時代早期のみならず、縄文時代晩期にも部分磨製石鏸の存在を指摘し、注意を促している(齋藤1986)。この中で齋藤氏は、あつかった岐阜県阿曾田遺跡・中村遺跡・北裏遺跡出土資料の帰属時期について、「縄文時代晩期(もしくは後期)」という表現を用いて、晩期を主体としつつも若干後期にまでさかのぼる可能性をも残している。大工原豊氏も関東地域・東海地域の後期から晩期に属する「局部磨製石鏸」を分析されている(大工原1990)。まず、関東地域にみられる、後期前半から弥生時代前期終末にまで所属する一群について、「I形態(凹基無茎鏸:筆者註)であることと、黒曜石であることを十分条件とする局部磨製石鏸を「関東型局部磨製石鏸」と」された。一方、齋藤氏があげられた岐阜県美濃地域の一群については、「安山岩(恐らく下呂石:筆者註)を用い、形態規制の緩やかな中部高地以西の局部磨製石鏸を「中部型局部磨製石鏸」と」された。出現の主体は晩期以降であることと、中村遺跡に見られる1点の黒曜石製の「局部磨製石鏸」の存在から、「・・・こうした石鏸が独自に発生したとみるより、関東地方から伝播したと考えるのが妥当であろう」と述べられている。

筆者は、現在のところ、この石鏸の部分磨製という志向自体が、関東(北関東)地域から伝播したものか、東海地域で独自発生したものかの評価は持ち合わせていない。しかし、大工原氏のいうところの「中部型局部磨製石鏸」の

消長は、東海地域における根挟みのそれにはほぼ近い。また、部分磨製により、石鏃の厚さが3.5mmから4mm程度にまで薄くなっている効果が窺えられる。これらのことから東海地域においては、部分磨製石鏃と根挟みがある程度有機的な関係を持っていたものと考えられる。

今回、名古屋市牛牧遺跡（註6）と同市雷貝塚（註7）・愛知県大六遺跡・稻荷山貝塚でも部分磨製石鏃の存在を確認することができた（図12）。これらの石鏃はすべて下呂石製であり、形態は伊川津貝塚で見てきたものと類似する。また、重心部分を中心とする研磨により、石鏃自体の厚さは3.5mmから4mm程度にまで薄くされている。これまで知られていた部分磨製石鏃出土遺跡の中で、根挟みが出土している遺跡は黒曜石製石鏃が主体の群馬県千綱谷戸遺跡以外ではなく、特に下呂石製主体の東海地域では、共に出土している遺跡は知られていなかった。今回、根挟みが出土している稻荷山貝塚で数点もの部分磨製石鏃を見つけることができたのは多いに注目すべきことであり、今後西三河や尾張地域での根挟み出土遺跡からも部分磨製石鏃の発見が期待される。

6 まとめ

以上、根挟みとその周辺について考察してきた。これまでの分析をまとめると、以下のようになる。

(1) 現在までのところ北は秋田県柏子所貝塚から西は和歌山県鳴神貝塚までみられる。分布の中心は東北地域と東海地域である。内陸部の遺跡や日本海側の事例も徐々に増えてきており、今後もこの傾向は注目される。時期的には、後期後葉以降から見られる可能性があるものの、主体的に見られるのは晩期で、下限は大洞C2式併行期ごろのようである。

(2) 東北地域と東海地域とでは形態に差があることが以前から指摘されていた。今回、最大径部の断面形という別視点から、形態の差を指摘した。これは、製作工程にも関連する可能性を指摘したが、今後、根挟みのみならず、両地

域の鹿角製品製作状況全体を分析する必要がある。また、東北地域では同じく石鏃の装着が知られる回転式離頭銛との関連も考慮しなくてはならない。さらに、東海地域の資料で指摘される、長身のものの存在は、機能的な側面からも注目される。

(3) 根挟みの多くは欠損した状態で出土する。今回、欠損傾向を三パターンに分類した。いずれも、石鏃を装着して使用したときの衝撃によるものと考えられる。また、欠損後のものを再加工して、根挟みおよび鏃に転用している例を提示した。

(4) 東北地域・東海地域における根挟みに対応する石鏃についてみてきた。根挟みの切込み部の大きさから類推して、切込み部凹形の根挟みでは幅4mm以下、同V形の根挟みでは幅5mm以下の石鏃が対応するものと考えられる。現在のところ、東海地域での根挟みに対応する石鏃の形態は、東北地域のそれよりも幅広い感がある。また、東海地域の下呂石製を主体とした部分磨製石鏃の出現は、根挟みと有機的関係を持っている可能性が高いといえる。

これらのことともとに、最後に、根挟みの機能・用途に関して想定を試みたい。

まず、今回取り扱ったものには、東北地域と東海地域とで、形態の差が存在することは指摘した。しかし、当地の鹿角製品製作状況による差が反映された可能性があることや、切込み部の幅に大きな差がないこと、今後内陸部遺跡からの出土例が増加し分布的空白が小さくなっていく可能性が高いことなどから、これらの使用にはそれほど相違がなかったのではないかと考えられる。また、内陸部遺跡での出土の様相から、狩猟活動での使用が主体ではなかったかと考えられるのである（註8）。

問題となるのは、なぜ根挟みという道具が出現・盛行したのか、である。これは根挟みが矢の一部としてどのような役割を担っていたのか、が大きく関わってくる。須藤氏は「根挟みを用いる矢柄の装着法は北海道アイヌも行っている。これは「マカニット」とよばれ、矢柄と

（註6）斎藤基生氏のご教示による。

（註7）川合 剛氏のご教示によれば、8点確認されているとのことである。図12の7～9は氏からご提供頂いた図面である。

（註8）内陸部遺跡などでは、根挟みは焼獸骨などとともに出土する場合が多いからである。

鏃の接目に用い、鏃に重みをつけ、貫通力を増す利点があるといわれている」と述べられている(須藤編 1984)。西本氏も同様にアイヌの民族例を参照し、鏃と矢柄の中間に用いられた中柄ではなかったかとし、「矢の先を重くして、矢全体の重心を調整するためと言われている」とされている(西本 1987)。ただ西本氏が指摘されているように、マカニットは骨製であることが知られている。

しかし、今回とりあげた根挟み自体は、長さ・幅がさまざままで、重量にも幅があるものと考えられる。また、小型のものも多く存在し、鏃に重みをつける効果があまり期待できないようなものも存在する。

清野謙次氏は、根挟みに毒矢としての使用を想定されている(清野 1969)。清野氏は根拠など多くを語られていないが、大変魅力的な仮説である。アイヌの民族例にも毒矢が用いられたことがよく知られているが、これらではタケ類で作られた鏃の凹みに毒を入れている。根挟みに装着されたと考えられる石鏃にはそのような凹みは存在しない。しかし、民族事例の引用から、想定によっては毒の塗布は可能である(石川 1963)。

参考文献

- 麻生 優編,1961『西貝塚』磐田市教育委員会。
- 石川元助,1963『毒矢の文化』東京 紀伊国屋書店。
- 大野延太郎,1901「三河國発見の鹿角器を見て」『東京人類学雑誌』16巻182号.321～325頁。東京人類学会。
- 大野延太郎,1905「愛知縣下旅行調査報告」『東京人類学雑誌』20巻230号.344～351頁。東京人類学会。
- 金子浩昌・忍澤成視,1986・1987『骨角器の研究』縄文篇 I・II。東京 慶友社。
- 上敷領 久,1987「東海地方先史時代の骨角器」『東アジアの考古と歴史 岡崎敬先生退官記念論集』中.166～180頁。岡崎敬先生退官記念事業会。
- 清野謙次,1969『日本貝塚の研究』東京 岩波書店。
- 金野良一編,2000『大洞貝塚』大船渡市教育委員会。
- 齋藤基生,1986「縄文時代晩期の部分磨製石鏃について」『古代文化』38-3.128～137頁。財團法人 古代學協會。
- 新庄屋元晴・阿部 恵ほか,1986『田柄貝塚』III.宮城県教育委員会。
- 須藤 隆編,1984『中沢貝塚』東北大学文学部考古学研究室。
- 大工原 豊,1990「縄文時代後・晩期における局部磨製石鏃の展開と意義—縄文時代における石器研究の一試論—」『青山考古』8.39～57頁。青山考古学会。
- 新美倫子,2003「骨角器・貝製品」『埋蔵文化財調査報告書 44 玉ノ井遺跡(第3・4次)』100～103頁。名古屋市教育委員会。
- 西本豊弘,1987「骨角製漁具 —とくにネバサミについて—」季刊考古学 21.68～71頁。東京 雄山閣出版。
- 丹羽百合子,1984「骨角器」『なすな原遺跡 —No.1 地区調査』597～605頁。なすな原遺跡調査会。
- 文化財保護委員会,1952『吉胡貝塚』。
- 渡辺 誠,1973「鹿角製根挟みに関する覚え書」小田原考古学会会報.5.104～110頁。小田原考古学研究会。
- Kamakichi Kishinoue,1911 Prehistoric Fishing in Japan,Journal of the College of Agriculture, Imperial University of Tokyo7-3,pp.327～382.

筆者は根挟みの第一義的な存在意義を、石鏃を装着した根挟みを事前に用意しておくことで、石鏃部分には触れず矢柄に装着できることだったのでないのか、と想定している。これが冒頭で「一つの独立した道具でありながら、使用時には矢の一部分として機能していたと想定される遺物」とした理由である。

今回、根挟みの消滅の状況および、渡辺氏が問題提示された動物相との関係を追究するまでには至らなかったのは、筆者の力不足による。最後に今後の課題としたい。

この小論をまとめるにあたり、齋藤基生・川合 剛・須藤 隆・渡辺 誠の諸先生、および愛知県埋蔵文化財センター諸氏からは多くのご教示を賜りました。また、渥美町郷土資料館・大船渡市立博物館・奈良県立橿原考古学研究所博物館・滋賀県立安土城考古博物館・瀬戸市教育委員会・天理大学天理参考館・東北大学考古学研究室・東北歴史博物館・名古屋市博物館・名古屋市見晴台考古資料館には、資料調査に便宜をはかっていただきました。ここに感謝の意を申し上げます。